

## アトモスフィア

## 原 点 回 帰

福 森 義 宏\*

“原点回帰”。東日本大震災と原子力発電所事故後、よく耳にする単語である。「原点回帰とは、その問題の根源をなすにとらえられる要素、すなわち原点に立ち戻って考え直すこと」とある国語辞書に記載されていた。政党マニフェスト、エネルギー政策、地震・台風の防災設備等々、原点に戻り、再考することが求められている昨今である。しかしながら、その“原点”が曖昧では、“回帰”もできない。日本生化学会の原点は何であろうか？ 日本生化学会は、1925年（大正14年）に柿内三郎氏等の尽力により創設された。その際、柿内三郎氏は、「生化学会の特徴の第一点は“本会の主体は併合した地方部会にあること”，第2点は，“会員相互のFraternityである”と述べている（参考文献：近代の生化学（上代皓三編））。

現在、日本生化学会には、8支部があり、所属する会員数に大きな差があっても、それぞれHPを開発し、活発に学会活動を行っている（<http://www.jbsoc.or.jp/about/branch.html>）。各支部では、特に、若手の育成に力を入れており、“奨励賞”“優秀賞”を設けている支部が多い。私が支部長を務めている北陸支部では、“支部奨励賞”の他に“学生ベスト発表賞”を設け、学生の口頭発表のモチベーションとなっている。一方、残念なことは支部の意見や要望が学会執行部に伝わりにくい状況にあることである。これまでは、年1回の大会開催中に開催される支部長会議が会長と意見交換できる場であったが、来年の公益社団法人化後の新体制では、支部推薦理事が執行部に加わることが可能となり、支部と本部の一体感が強まり、生化学会の地方での活動が一層活発になると期待される。さて、もう一つの特徴である“Fraternity”であるが、その意味はいくつかある。私が大学受験で使用した約40年前の「赤尾の豆単」には掲載されていなかった（あるいは、当時、覚えた記憶が無い）英単語である。多くの英語辞書では、同意語を“Brotherhood”として挙げている。柿内三郎氏は“兄弟のような仲間”として使用したのではと、推察できる。兄がたとえ有名大学教授でも家族間では〇〇先生とか〇〇教授とは呼ばない。柿内三郎氏は、生化学会では、互いに〇〇さんと呼ぶ事を期待されたかもしれない。しかしながら、当時の会員数（約500名）とは比較にならない会員数（約10,000名）で組織される現在の生化学会において“Brotherhood”をどのように醸成するかは、難しい問題である。只、支部活動においては、〇〇さんと呼ぶことで、“Brotherhood”を少しは具現化できると期待される。

生化学会設立から85年が経過した。これまで、多くの先輩諸兄姉により様々な改革が実施されてきた。生化学会という組織が“原点回帰”が必要なほど不活発化、停滞しているとは全く思わないが、一度立ち止まり、足元を見つめ直し、そして次の新しい一歩を踏み出してゆくことは、あらゆる組織に必要なことかもしれない。蛋白質の $\alpha$ ヘリックスのように真上から見ると何も進んでいないように見えるが、横から見ると確実に3.6残基のアミノ酸が進んでいる学会であってほしいと思うこのごろである。

\*金沢大学理工研究域、日本生化学会理事・北陸支部長